様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２１ 日現在

機関番号：３４４１６
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６２８５１２４

研究課題名（和文）パネルデータによる家族社会学研究のための基盤整備

研究課題名（英文）Development of foundation for research on family sociology by panel data

研究代表者
保田　時男（YASUDA, Tokio）

関西大学・社会学部・教授

研究者番号：７０３８８３８８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　11,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、家族の社会学的研究におけるパネルデータの利用に関する方法論的な基盤を整備することを目的としている。本研究の中核は、回顧調査によるパネルデータの収集の有効性を実証することにある。そのために、過去20～30年間の家族イベントや意識を回顧してもらう郵送調査を実施した。調査の結果、回顧調査によるパネルデータは長期間の変化を十分に測定できており、豊富なデータを効率的に収集できることが示された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to develop a methodological foundation for the use of panel data in family sociological research. The core of this study is to demonstrate the effectiveness of panel data from retrospective survey. For that purpose, a mail survey was conducted to recall family events and consciousness over the past 20 to 30 years. As a result of the survey, the panel data from retrospective survey was able to sufficiently measure the long-term change, and it was shown that we can collect vast data efficiently.

研究分野：社会調査法

キーワード：社会学　家族社会学　パネルデータ　パネル調査　社会調査法

１．研究開始当初の背景

パネルデータの収集・分析は、家族の計量的研究を精緻化するために必要不可欠となってきている。しかしながら、パネルデータを社会学的な研究に活用するための方法論的基盤は、いまだ十分に整備されていない、と考えた。1 つの問題は、家族のパネル“データ”を収集するためにどこまでパネル“調査”が必要なのかが十分に検討されていないことである。実際の家族研究において、具体的にどのような課題についてパネル調査の必要性が高く、どのような課題が回顧調査で補えるのか、基本的な検討をおこなうことは、調査の低コスト化、効率化のために不可欠な課題であると考えた。

もう 1 つの大きな問題は、他分野で確立されたパネルデータの分析技法について、家族研究に適用する際の有効性が十分に検討されていないということである。何が素朴な分析技法で明らかにでき、何が高度な計量モデルを必要とするのかを、具体的な家族研究のなかで方法論的に検討することが必要であると考えた。

２．研究の目的

本研究の目的は、家族社会学におけるパネルデータ研究の方法論的な基盤を整備することにある。パネルデータを用いた日本の家族研究は、近年急速に拡大しているが、パネル調査によるデータ収集や高度なパネル分析がどういった家族現象の研究について必須とされており、逆に、どういった現象はより素朴で省力的な調査・分析技法でも捉えることができるのかは、十分に検討されていない。本研究では、すでに実施されているパネル調査（NFRJ-08Panel）を方法論的検討の材料とするとともに、回顧調査によるパネルデータの補填可能性を探る郵送調査（NFRJ-16R）を実施する。これらの分析の集積から、日本の家族社会学にとって有効なパネルデータの収集・分析方法を方法論的に整理する。

３．研究の方法

本研究では、広く方法論的な議論を行うために、日本家族社会学会の学会員を中心として「家族社会学パネル研究会」を組織した。この研究会では、定期的に研究会合を開き具体的なパネルデータの分析や調査実践の経験をもとに議論を行うとともに、本研究の中心課題の１つである回顧調査の実施に向けて、調査内容の検討を行った。

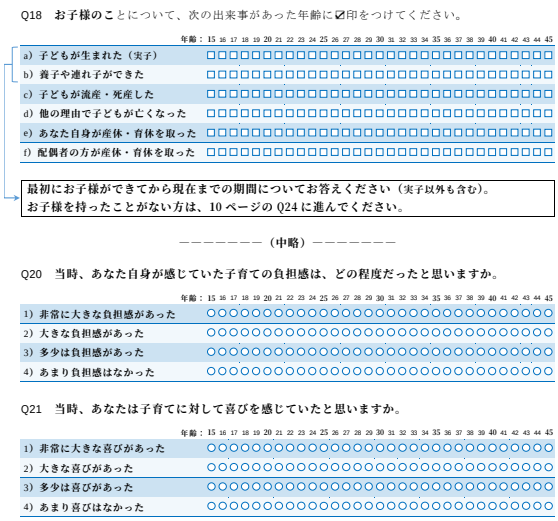
実施した回顧調査（NFRJ-16R）の調査概要は以下のとおりである。

調査名称：青年期から成人期の振り返り調査（NFRJ-16R）
調査主体：家族社会学パネル研究会（研究代表 保田時男）
調査時期：2017 年 1～3 月
調査方法：郵送配布回収
調査対象：対象 3 市に在住の昭和 47～56 年生まれ男女（2016 年末日時点で 35～44 歳）
計画標本サイズ：対象 3 市各 900 人（計 2700 人）
抽出名簿：住民基本台帳（※対象 3 市は、大阪府豊中市、千葉県鴨川市、愛知県長久手市）
抽出方法：対象市内の地域区分で二段抽出
実査委託：一般社団法人 中央調査社
有効回収率：1351/2700＝50.0%

４．研究成果

家族社会学パネル研究会は、最終的に 54 名のメンバーで活動し、計 10 回の研究会合を開いた。会合のなかではパネルデータの計量的分析の報告が行われるとともに、質的なライフヒストリー研究における回顧法の検討報告なども行われ、広くパネルデータの収集と分析についての議論を深めることができた。また、パネルデータの分析チュートリアル・相談会も開かれ、家族社会学分野における分析技法の浸透にも貢献することができた。

回顧調査（NFRJ-16R）の設計に関しては、研究会のなかから 8 名のワーキンググループを中心として議論が行われた。調査内容もさることながら、自記式の郵送調査において過去 20～30 年の記憶を想起してもらい、容易に回答することが可能な形式を探ることに重点を置いた。10 種類以上のパターンを慎重に検討した結果、最終的に図 1 のような形式が最適であると判断した。この形式で約 50%の回収率に達し、データクリーニングの結果、十分に分析に耐えられるデータが得られていることが確認できた。回顧調査において、このような実効的なパネルデータの収集が可能であることを証明できたことが、本研究のもっとも大きな成果であると考えている。


Q18　お子様のことについて、次の出来事があった年齢に☑印をつけてください。

年齢：15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45

a）子どもが生まれた（実子）
b）養子や連れ子ができた
c）子どもが流産・死産した
d）他の理由で子どもが亡くなった
e）あなた自身が産休・育休を取った
f）配偶者の方が産休・育休を取った

最初にお子様ができてから現在までの期間についてお答えください（実子以外も含む）。
お子様を持ったことがない方は、10 ページの Q24 に進んでください。

――――――――（中略）――――――――

Q20　当時、あなた自身が感じていた子育ての負担感は、どの程度だったと思いますか。

年齢：15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45

1）非常に大きな負担感があった
2）大きな負担感があった
3）多少は負担感があった
4）あまり負担感はなかった

Q21　当時、あなたは子育てに対して喜びを感じていたと思いますか。

年齢：15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45

1）非常に大きな喜びがあった
2）大きな喜びがあった
3）多少は喜びがあった
4）あまり喜びはなかった

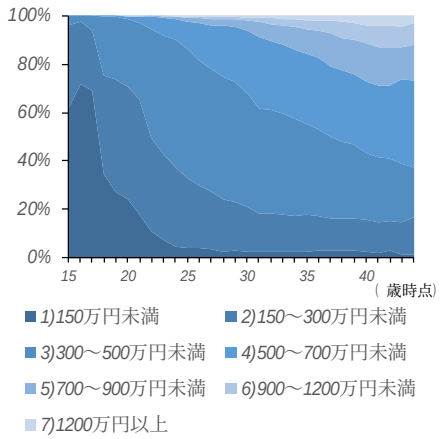
図 1　NFRJ-16R の調査票の一部

回顧調査 NFRJ-16R の回収率は 50.0%で非常に高いとは言えないが、内容を考えると十分なものと考えている。少なくとも同じように 20～30 年間の内容をパネル調査で収集するよりは極めて高い回収率のはずである。ただし、調査地による回収率の差がそれなりに大きかったことには注意が必要である（豊中市 47.6%、鴨川市 47.7%、長久手市 54.9%）。

コスト面から捉えても、NFRJ-16R の回収状況は十分に評価できる。直接の調査費用は約 700 万円で、言うまでもなくパネル調査の場合の費用を大きく下回る。また、クリーニングにかかる人的コストも、その都度データが追加されるパネル調査に比べればかなり小さく収まった。何よりも非常に短期間で 20～30 年分のパネルデータが収集できていることが大きい。調査テーマの設定から短期間で結果が出る即時性に大きな意味がある。

データの品質に関して直接的なデータ比較による検討を行うことはできないものの、十分な品質が期待できると捉えている。ほとんどの調査項目について回答者は何らかの「変化」を回答しており、少なくとも、ただまっすぐに線を引くだけのいい加減な回答をしている様子はない。

a）男性



b）女性

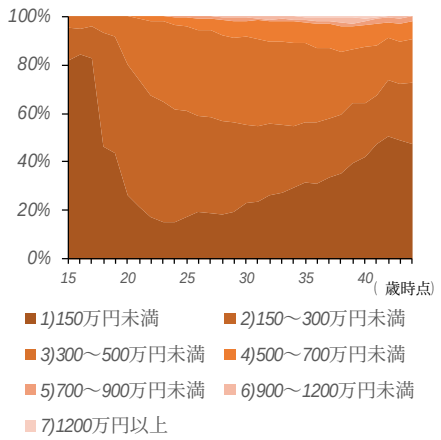
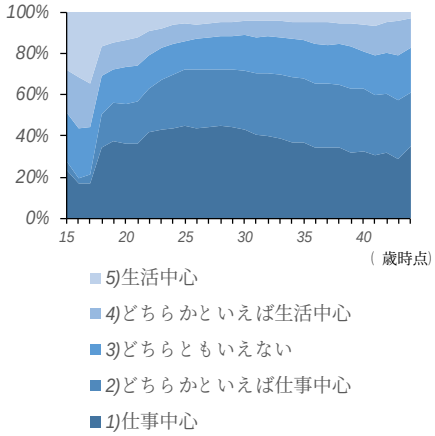


図 2　本人の仕事収入の変化

a）男性



b）女性

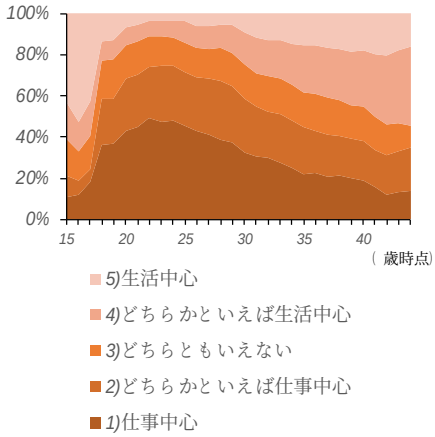


図 3　仕事と生活のバランスの変化

また、実際に集計してみると、多くの点で一般的な知見に照らし合わせてもっともらしい結果が得られている。たとえば、仕事の収入の変化やワークライフバランスの評価を単純集計すると、図 2、図 3 のように推移する。男性が仕事中心の暮らしをほぼ維持したまま収入を増やしていくのに対して、女性が低収入の仕事に就き生活中心に移行していく様子が読み取れる。

ただし、測定があまりうまくいっていないと思われる調査項目も存在する。定位家族での状況を捉えるために 15 歳時からの回答を求めているものの、一部の項目について（親との援助関係など）、親から独立した後の状況に限って回答しているケースが散見された。また、「生活全体の満足度」といった漠然としすぎている項目については、うまく変化が捉えられていないように感じられた。ある程度の具体性がないと何を回顧してよいのか判断できず、あいまいに回答してしまうようである。また、単純に回答の仕方を誤っているケースもいくらか見受けられた（線を引くのではなく、変化があった歳にだけチェックを入れるなど）。多くの場合はクリーニングで修正が可能であったが、回答形式の改

善は今後も考える必要がありそうである。
NFRJ-16R の実施によって回顧調査によるパネルデータ収集の可能性は大きく開かれたと考えている。また、同時にいくつかの課題も明らかになった。第 1 に、NFRJ-16R では回顧調査が比較的適合しやすい家族形成期を対象に調査を実施したが、目立ったライフイベントが発生しにくい中高年期を対象に同様の調査が可能なのか検討を要する。また、本格的に死亡リスクが高くなり、認知能力も低下する後期高齢期の人々を対象にするには、やはり回顧調査はそぐわずに、パネル調査の必要性が高い。第 2 に、今回は調査事例として 3 つの市を取り上げたが、この様式の有効性が一般化できるのか見当が必要である。第 3 に、NFRJ の大きな特徴であるダイアドを並列させる調査方式を NFRJ-16R ではあまり活用できていない。ダイアドを並列させてかつ回顧的な調査がどのようなやり方でどこまで可能なのか、さらに方法論的な検討が必要である。第 4 に、データの品質についてやや主観的に評価を下しているが、より客観的な評価方法を検討する必要がある。パネル調査との量的な比較と同時に、回答者がどのような気持ちで回答したのか、質的なインタビューを交えることも有効ではないかと考えられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 15 件）

①保田時男 2017 「回顧式家族調査 NFRJ-16R のねらいと経過」 『家族社会学研究』 29(2): 216-222.査読なし

②西野理子 2014 「追跡パネル調査の改善に向けて：全国家族パネル調査の経験より」 『中央調査報』 683: 1-7.査読なし

〔学会発表〕（計 17 件）

①保田時男 「家族形成期の行動・意識の変化は回顧調査でどこまで把握できるか―郵送回顧調査 NFRJ-16R の結果概要―」 第 27 回日本家族社会学会大会，2017.

②保田時男 「回顧的家族調査 NFRJ-16R によるパネルデータ収集の試み」 第 63 回数理社会学会大会，2017.

③保田時男 「NFRJ における回顧調査の可能性」 第 25 回日本家族社会学会大会，2015.

〔図書〕（計 1 件）

①筒井淳也・水落正明・保田時男編 2016 『パネルデータの調査と分析・入門』 ナカニシヤ出版.総ページ数 152

〔産業財産権〕
なし

〔その他〕
「家族社会学パネル研究会」ホームページ
http://nfrj.org/fspanelwg_index.htm

６．研究組織

(1)研究代表者
保田 時男（YASUDA, Tokio）
関西大学・社会学部・教授
研究者番号：70388388

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
西野 理子（NISHINO, Michiko）
東洋大学・社会学部・教授
研究者番号：50257185

永井 暁子（NAGAI, Akiko）
日本女子大学・人間社会学部・准教授
研究者番号：10401267

多賀 太（TAGA, Futoshi）
関西大学・文学部・教授
研究者番号：70284461

筒井 淳也（TSUTSUI, Junya）
立命館大学・産業社会学部・教授
研究者番号：90321025

田中 重人（TANAKA, Sigeto）
東北大学・文学研究科・准教授
研究者番号：60294013

三輪 哲（MIWA, Satoshi）
東京大学・社会学研究所・教授
研究者番号：20401268

水落 正明（MIZUOCHI, Masaaki）
南山大学・総合政策学部・教授
研究者番号：50432034

田中 慶子（TANAKA, Keiko）
明治学院大学・社会学部・研究員
研究者番号：50470109

菅澤 貴之（SUGASAWA, Takayuki）
同志社大学・学習支援・教育開発センター・准教授
研究者番号：30551999